

5つの性を持つインドネシアのブギス族

～イスラームと土着文化の狭間で～

政策科学科 3年 杉村千依

政策科学科 3年 松田莉歩

国際政策文化学科 3年 仲田莉々

国際政策文化学科 3年 範公康

1 研究目的

本研究では、ブギス社会における土着文化と宗教の共存の実態を明らかにすることを通して、グローバリゼーションが進む現代社会で異文化理解を進めるためのヒントを得ることを目的としている。インドネシアのスラウェシ島に暮らす「ブギス族」は、イスラームを信仰する部族でありながらもオロワネ（男）、マクンライ（女）、チャラバイ（偽りの女）、チャラライ（偽りの男）、ビッス（両性具有）という独自の性区分を持っている。この5つの性区分は、土着文化としてブギス社会に古くから根付いていた。しかしこの概念は、人間を男女に明確に区別するイスラームの教義とは相反するものである。以上を踏まえて現地調査や文献調査を行い、ブギス族の土着の文化とイスラームが社会の中でどう折り合いをつけているのかを探った。

2 結論

本研究を通して明らかになったことは、イスラームという「宗教」とブギス族土着の「文化」が、それぞれ互いの影響を受けて形を変えたり、解釈の工夫をしたりしてきたということだ。異なる価値観を持つ宗教と文化が互いに混ざりあい存在してきたことで、両者の間に大きな軋轢を生むことなく共存することができたと考えられる。またブギス社会では、チャラバイ、チャラライ、ビッスそれぞれが社会的役割を持ち、自身の心の性に基づいた職を持つことができていたことが分かった。このことから、ブギス族の土着文化には性的少数者を社会の中に取り込み、存在させるメカニズムがあると考えられる。一方で、ブギス族の性区分を取り巻く状況が刻一刻と変化しているという事実も明らかになった。例えば、古くからブギス社会で重要な役割を担ってきたビッスの立場は現在危ぶまれ

る状況にある。ブギス族の土着文化の一つとして守られてきた性的少数者の立場も、今後変化が見られる可能性がある。

3 活動内容

プロジェクト奨学金計画書を作成し、それに基づいて文献調査や現地調査の準備を行った。現地調査では、インドネシアのスラウェシ島に位置するマカッサルとボネを訪れ、ブギス族の人々の暮らしや文化の観察、そしてビッスやブギス文化の研究者など、現地の人々への聞き取りを3日間かけて行った。以上の現地調査で得た事実を中心に、文献の情報とあわせて総合的に分析、考察を行った。



インドネシアの現地調査の様子

2023年9月8日 研究協力者撮影